

# 妖精とボンゴレ

ラッキー 10

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

十代目ボンゴレファミリーがフェアリーテイルの世界で大暴れしたり、自分たちがなぜこの世界に来たのかをしらべていくうちに驚きの事実が発覚するというストーリーです。

# 目次

十代目ボンゴレファミリー来る	1
FAIRY TAILと十代目ボンゴレ	
ファミリー	5



# 十代目ボンゴレフアミリー来る

「いいんですか、十代目？」

黒いスーツを着ている20歳くらいの青年が問いかけている。

その問いかけている青年はボンゴレボスの右腕と裏社会では恐れられているほどの人物、

獄寺隼人。

そして、問われている青年は若きボンゴレ十代目ボス、澤田綱吉。

「うん、みんなは俺の大切な守護者だから、ついてきてほしいんだ。」

みんなとは、ボンゴレファミリーのみんなである。

嵐の守護者獄寺隼人、雨の守護者山本武、雷の守護者ランボ、雲の守護者雲雀恭弥、晴れの守護者笹川了平、霧の守護者クローム髑髏のことだ。

「はは、やっぱ綱らしいな。」

「山本、てめえー十代目がせっかく連れて行ってくれるんだぞ、礼くらい言いやがれ！」

「ちよっと、獄寺君も山本も喧嘩はやめようよ。」

獄寺と山本の喧嘩を止めたのがボンゴレ十代目ボスの綱である。

この様子を見てみると綱はボンゴレボスというよりもお世話係にしか見えない。

「十代目がそうおっしやるなら。」

「まあ、喧嘩なんてやめて旅に行こっか。」

守護者全員がまたそれぞれ違う返事をして、獄寺がもつとまじめにやりやがれという喧嘩に

なつたのを止めたのも綱である。

「ここがリボンたちアルコバレーノが誕生した山か。」

「リボンさんたちアルコバレーノが誕生した場所だから一度来てみたかったんすよねー。」

獄寺が言い終わると同時に空が急に光りだして光が収まったと思つたら見知らぬ場所になっていたことはその場にいた守護者全員がすぐにさつしたが、綱はそれよりも早く超直感でさつした。

くくそして、舞台はフェアリーテイルの世界に変わるくく

「ここはどこなんだ？」

ツナがそういうがその答えを知るものはこの近くにはいなくなった・・・約一名を除いては・・・。

守護者全員、あのヒバリさんですら驚いた様子を隠しきれていなかったくらいだから。

「ボス、あそこに人がいる。」

「あ！本当だ、あそこにいる人にここがどこなのかとか詳しく聞いてみようよ。」  
「極限にあそこにおられるおじいさんにきくしかなあいく。」

あたり一面に聞こえる声で叫んでいるのがボンゴレ晴れの守護者、笹川良平だ。

その声が聞こえたのかそのおじいさんがひどく驚いた感じでごつちを見ていたことに気づいたツナがそのおじいさんの近くに駆け寄った。

「あの、すいません。ここがどこなのかとか、いろいろと聞いてもよろしいですか？」  
「うむ、まあ困っているものを見捨てておくのは性分ではないからのう。」

そのおじいさんはツナたちの質問に答えているうちにツナたちが異世界の人間だと気づいたようだ。

「おぬしらはなしを聞いている限りおぬしらはこの世界の住人じゃないようだ。」

ツナたち全員最初はそのおじいさんがおかしいのかとも思ったけどすぐに現状を理解した。

「わしはマカロフ、おぬしらは行くところがなからう。」

「FAIRYTAILに来るといいみんな大歓迎じゃぞ。」

ツナたちはFAIRYTAILが何なのかマカロフに説明してもらってギルドだということがわかった。

そして、全員が承諾したところで自己紹介をしてFAIRYTAILに向かうことにした。



## FAIRY TAILと十代目ボンゴレファミリー

十代目ボンゴレファミリーのツナたちはマカロフにフェアリーテイルまで案内してもらおう途中、魔法について教えてもらっていたらマグノリアにあるフェアリーテイルについていた。

そこで、マカロフから簡単な自己紹介があった。

自己紹介が終わると同時にギルドにいたみんなが言った。

「フェアリーテイルにようこそ。」

「あ、よろしくお願ひします。」

ツナが十代目ボンゴレファミリーを代表して一言言った。

ツナたちはどこから来たのかとか聞かれると思っていたら思いがけない声が上がった。

「おい、俺と誰か勝負しようぜ。」

声の主はもちろんなツ・ドラグニルだ。

「え、いきなりそれかよー」

ハヤトが予想もしなかった声が上がったのでちよつとテンションが上がっていた。

ハヤトのテンションが上がっているのは10年後の未来での戦いが終わってしばらくしてから十代目の右腕にふさわしい力を手に入れるためにたくさんの勝負してきたからだ。

「よし、俺が相手をしてやるぜ。」

ハヤトが言い終わると同時にマスターマカロフからヤメイと声が上がったので「なんだよ、じつちゃん？」という燃えているナツの姿があった。

現にナツが一番戦えることを喜んでいたので。それは、ハヤトもおなじだが。

「落ち着け、ナツ。ハヤトたちはギルドに入ったばかりじゃ。それどころか実力も未知数じゃ、おぬしと今戦わせるわけにはいかぬ！」

ナツはマスターマカロフの最後の一言で一步後ずさりしたがハヤトはツナやタケシ、リヨウヘイが止めるのを無視してそんなの関係ねえと強く言い切った。

「マスター、ここまで強い覚悟を持っているからギルドの裏でやらせてあげればいいじゃないですか。」

鎧を身にまとった騎士と思われる女性がマスターマカロフを説得していた。

その女性の名前はエルザ・スカーレット、フェアリーテイルのS級魔導士。マスターマカロフがまだ悩んでいるところに他の女性が近寄ってきた。

「マスター、そんなに気になるのであったらマスターが審判をしてあげれば

いいじゃないですか。」

「うむ、ミラちゃんと呼ぶとエルザがそういうのであるなら致し方あるまい。」

今、ミラちゃんと呼ばれた女性はフェアリーテイルのS級魔導士、ミラジエーン・ストラウスのことである。

「よっしやー、ナツ手加減はしねえからな。」

「望むところだ。」

さつきまでとは違いすでに戦闘態勢に入っている二人。

「ナツVSハヤト試合開始」

マスターマカロフがそういうと同時に鐘が鳴った。

そしてみんながリュウが返ってきたと騒ぎだして試合が一時中断された。

